

# 幼小連携の人事交流における教員の意識変容に関する研究

佐藤 康富（初等教育学科）

## A Study on Consciousness Change among Teachers through the Personnel Interchange Program between Kindergarten and Elementary School

Yasutomi Sato

Department of Primary Education, Kamakura Women's University Junior College

### Abstract

The purpose of this study is to clarify a change in the consciousness among teachers through the personnel interchange program between kindergarten and elementary school.

This study analyzes the effects of this program through an interview with a teacher at a kindergarten. As a result, I discerned the following three roles of the teacher.

First, they need to coordinate with the children, teachers, families, and their communities to build and keep a good relationship.

Second, it is important for teachers and instructors to acquire childcare skills and to create good lesson plans using their appropriate knowledge of children.

Third, they need to have a promoting study system with a concrete theme to establish cooperation between the kindergarten and elementary school.

**Key words:** cooperation between kindergarten and elementary school, personnel interchange program, consciousness, acquiring skill of childcare and organizing good lesson plans, promoting study system

**キーワード:** 幼小連携、人事交流、意識変容、保育・授業組織力、研究推進体制

### 1 問題と目的

幼小連携は今日的教育課題の1つである。このような幼児期の教育から小学校教育への連携はニュージランドにおいては「学びの持続性(Continuity of learning)」として取り上げられ、報告書も出されている(ERO, 2015)。また、イギリスにおいては1990年代後半より就学前の幼児から初等教育段階の児童まで大規模な縦断研究を行い、効果的な幼小連携のあり方が提案され、こ

の分野の教育研究が世界的なトレンドの1つとなっている(Sylva, 2010)。我が国においては平成20年の幼稚園教育要領の改訂の際、第3章の指導計画作成に当たっての留意事項の「2特に留意する事項」の中で、次のように取り上げられている(文部科学省、2007)。

「(5) 幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続のため、幼児と児童の交流の機会を設けたり、小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会を設け

たりするなど、連携を図るようにすること。」

このような幼小連携が必要とされてきた背景については、幼稚園教育要領の基本と解説の中で、少子化により異年齢による交流の場の積極的活用、子どもの発達連続性、連続性に配慮した指導の在り方の重要性が指摘されている。

また、平成20年改訂の小学校学習指導要領では、第5節生活「第3指導計画の作成と内容の取扱い」で、次のように表記されている（文部科学省、2007）。

「(3) 国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」

この入学当初の合科的指導を小学校学習指導要領解説では「スタートカリキュラム」と呼んでいる。このような幼児期からの育ちに配慮したカリキュラムが考案されたのも、幼小連携の賜物の1つであろう。

ところで、幼小連携といっても、おおよそ4つのパターンに分けられる。1番多く実施されている連携が子ども同士の交流である。この子ども同士の交流、いわば、運動会や〇〇祭りを通した活動や給食を一緒に食べるなどの交流活動は国公立で84.5%、私立で58.4%が園児と児童との交流活動を行っているとしている（ベネッセ、2007）。これに続いて行われているのが第2の教師同士の交流である。このような子ども同士の交流活動を計画・実施するにあたっては共通理解は必要不可欠であり、また、子ども同士の交流から何を学ぶのかという振り返りも不可欠といえよう。第3にはカリキュラムの連続性があげられる。先に小学校側のスタートカリキュラムについて触れたが、無藤は幼小連携が子ども同士の交流を通して、幼児が小学校に慣れる段階から、各カリキュラムが2つの校種をつなげていくことに進んできたと評価する（無藤、2005）。また、平成22年に出た「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」の報告書では、子どもの発達や学びの連続性を保障することが大切であり、幼児期の

教育と児童期の教育は、それぞれの発達段階を充実させることが重要であり、一方が他方に合わせるものではないことに留意する必要性を指摘している。同時に、学びの基礎力を育む意味では、幼児教育も小学校低学年教育も共通しているといえよう（文部科学省、2010）。

しかし、このような連携が進む中、ほとんど進まないのが第4の保育者と教員の人事交流である。文部科学省初等中等教育局幼児教育課の平成24年度の幼児教育実態調査によると、長期派遣研修制度（1年以上）を利用して、小学校教諭が幼稚園に勤務、または幼稚園教諭が小学校に勤務する形の交流をおこなったのは0.8%、353団体中15団体しかない（文部科学省、2013）。これらの交流が進まない理由は2つあると考えられる。1つは校種間を跨いで指導するには隣接の免許状を有することが必須の条件といえるからだ。また、もう1つには長期派遣研修制度を利用するには身分保障や給与保障が必要になることから、公立の小学校と公立の幼稚園、または公立の保育所に限定されるからである。

長期の人事交流をした教員数が希少であるため、その実態やそこでの体験が見えないことが多い。酒井は秦野市や京都市での長期派遣で人事交流をした体験者の座談会や報告書から、むやみに双方の教育方法を取り入れるのではなく、改めて双方の専門性を認識し、互いの教育の独自性を認め合う姿勢が重要であると述べている（酒井、2011）。また、人事交流経験の当事者としての廣内は2年間の幼稚園教諭の経験を振り返って、幼稚園教諭の専門性として5つの点をあげている（廣内、2013）。①子どもを肯定的に見守り、内面を深く読み取る力、②広角的に子どもの姿を見る力、③ねらいに応じて柔軟に遊びを創っていく力、④遊びが深まるよう環境を作り、一人一人を援助していく力、⑤チーム保育が持てる力である。体験者のこのような声は貴重である。

そこで本研究では、改めて長期の人事交流を体験し、2校種間を往来した者が教員としてどのような意識の変化を経験したのかを辿るとともに、幼小をつなぐ教員の役割について明らかにしよう

とするものである。

## II 研究方法

### 1. 対象者

この研究の対象者である I 先生は平成27年時点では、教師歴9年目の女性教員である。人事交流で幼稚園教諭として勤務していたのは、7年目、8年目である。したがって、このインタビュー時点では8年目ということになる。この2年間は年長児の担任として勤務した。人事交流前は小学校に6年間勤務していた。経験した学年は1、3、4、5、6年生で、主に高学年を担当していたことが多い。I先生が在住するW市は16～17万人の地方都市である。山に囲まれた自然が豊かな地域といえよう。教育には力を入れており、人事交流を積極的におこなっている。古くから公立の幼稚園、小学校、中学校が隣接して存在する地域である。このことから、幼小の連携も盛んにおこなわれている。今回、人事交流で勤務した幼稚園はW市立E幼稚園で、4歳児が50名弱の2クラス、5歳児が55名前後の2クラスである。また、校種を移動した小学校は幼稚園に隣接するW市立E小学校で、児童数550名前後、21クラスの規模の学校である。

### 2. 調査期間・調査方法

調査期間は平成26年5月から平成27年の8月までである。約2カ月に1回のペースで、E幼稚園の園内研修に参加した後、I先生個人にインタビューをおこなった。インタビューは半構造化インタビューで、時間的には20分から長い時には2時間近くに及んだ。インタビュー実施日は平成26年5月27日、6月24日、8月25日、10月7日、11月25日、平成27年2月20日、8月6日、インタビュー合計時間は7時間37分。平成27年8月6日のインタビューはI先生が2年間の人事交流を終え、E小学校に戻ってからのものである。インタビューはフィールドメモとして記録し、その後、インタビューデータとして書き直したものである。また、研究にあたっては、事前に大学の倫理審査委員会に計画を提出し承認を得ている（鎌倫-14002）。E幼稚園のP園長に了承、I先生に承諾を得ている。なお、

インタビューを論文化した後も、I先生に語りが自分の意図したものであるかどうかを確認している。

### 3. 分析手続き

本研究では、インタビューデータの中から、幼小連携を進める上で努力している点、苦勞している点、新たに試みている点に焦点を当て抽出したものを分析の対象とした。インタビューを時系列に沿い、その変容を解釈的に分析した。発話ではできるだけ忠実に文字化することに努めたが、紙面の都合上、一部簡略化した部分もある。なお、本研究に登場する保育者や子どもの名前、施設の名前はすべてランダムにイニシャルで表記している。くわえて、インタビュー記述のところで、Rは研究者を表し、Tはインタビュー対象のI先生を表している。

## III 事例検討・考察

事例1 幼稚園に来て1年が経過しての思い（平成26年5月27日）

この日は年度が変わってからの初めての園内研修であり、幼・小・中の先生方が参加した研修会でもあった。また、園長が前任のN園長より、幼小を兼任するP園長に変わってからも初めての研修会であった。この研修会では保育の中で、子どもがどのような育ちをしており、また、どのような学びがあるかが話し合われ、それが小学校、中学校へどのようにつながっているのかも話題となった。I先生へのインタビューはこの後おこなわれたものである。

R：小学校から幼稚園に来て、何が大切であると感じますか。

T1：先生達のつながり、関係を深めることが、先生同士が理解することが大切だと思うのです。今年はラスト（2年間の交流人事）の1年ということもあり、吸収できることは更に吸収し、やれることは悔いの残らないようにしていきたいと思います。

R：先生が幼稚園に来て、変わったことは何ですか。

T2：子どもへの援助の仕方、小学校でいえば指

導の仕方が変わったと思います。たとえば、夏野菜を育てる活動があったとしたら、その取り組み方が違うのです。自分が小学校にいた時は、個も大事にしていたのですが、どちらかといえばクラス全体の雰囲気を良くしたいと考えていたのです。しかし、幼稚園の先生は個を観るプロ。一人一人の話を耳を傾ける。だからこそ、子ども一人一人の言葉や、言葉にできない態度に気付くことができるのではないのでしょうか。教師がそういう姿勢でいれば、気づくことができます。小学校の5、6年生の授業であっても、一人一人のつぶやきや気づきに敏感になって授業をしていきたいです。子どもの気づきやことばを残す保育をしていきたいです。

**R:** 幼稚園の先生としては1年間過ぎたわけですが、振り返ってどうですか。

**T3:** 今は2つの気持ちがあります。1つはこの1年間の流れを身体に覚えこませるようにしようということ。もう1つは幼小の距離を縮める、自分が架け橋になりたいと考えています。去年は何もかもが初めてで、必死でした。そして、正直、幼稚園の子がここまでできるのかと驚きました。1つ1つ試しながら、進める毎日だった。しかし、今年は1年間の見通しがあるので、自分なりに落ち着いて取り組んでいます。

**R:** 小学校の先生も、I先生が幼稚園に来たことで変化してきましたか。

**T4:** はい。正直、今まで小学校の先生の目はどちらかという、中学校へ向いていました。自分が人事交流で幼稚園に来たことで、小学校の先生の目も幼稚園へ向くようになったと思います。また、自分も積極的に幼稚園に学ぶことが多いことを伝えています。今まで、保育参観に来なかった先生も来てくれるようになりました。なかには、自分のことを心配してくれて足を運んでくれる人もいて、ありがたいです。そういう意味では先生同士の距離も縮まりました。また、先生同士ソフトボールなどの行事をすることで、ぐっと距離が近くなります。

このインタビューの中では、とくに2つの点が強調されている。1つは自分が幼小の架け橋にな

るという意識である。これはT3でも表れているが、人事交流として、自分が派遣された意味はこの幼小の先生方をつなぐことだと感じている点である。また、自分が幼稚園に来たことで、小学校の先生達の目が園に向いたことを敏感に感じ、それをいろいろな機会、場（オフィシャルではない教職員のスポーツ大会等）を利用し、積極的に働きかけている姿がうかがえる。2つ目は子どものつぶやきや発言を保育にどう生かすのかということである。これは1年目の時にやり残した自分自身の課題でもある。幼稚園における教育、保育の在り方がわかり、それを元に保育を展開することが重要であり、気づきを子ども達自身が意識することにより、継続した活動、保育が展開できることを実感したからである。そうすることが、子どもの気づきを広げ、深め、さらに探究へとつながる見通しを感じたからであろう。また、このような感覚がもてるのも、小学校で生活科を实践してきた経験によるところも大きいと考える。ここに幼小をつなぐ保育や授業の在り方の視点が見てとれる。

事例2 保育を計画し組織する視点の深まり（平成26年6月24日）

この日の園内研修会は幼稚園の職員のみで、保育の見直し、どのように援助をするのかが中心の研修であった。保育者として、どう環境構成をし、それを子どもの姿に応じて環境を再構成していくのか、この遊びを提供している保育者の意図、また、次にどのような見通しをもって保育を計画していったらよいのかが語られた。

**R:** 今年度はどんなことに力を入れてきましたか。

**T5:** 今年度は2年目ということもあり、クラスの枠組みを外し、学年で運営していこうと考えています。自分が学年主任ということもありますが、とくに、親が不安、小学校へ行くのも不安に思っているので、そういう親の不安を取り除いていきたいと考えています。また、子ども同士のつながりを作っていきたい。子ども同士がつながることで、安心できる環境を広げていきたいです。とりわけ、親から言われた衝撃の一言が耳に残ってい

ます。それは「小学校へ行くと、先生が遠く感じる」という言葉です。自分は小学校にいる時、一生懸命、子どものことも、親のことも考えていると思っていました。しかし、それは親の立場からすると、そうは感じていなかった。やはり、幼稚園の先生と小学校の先生では雰囲気が違うのです。**R**：話を変えて、最近の保育室内の掲示物の環境構成について教えて下さい。

**T6**：最近で紹介コーナー作りに力を入れています。昨年は3学期に、子ども達から各自が思う面白いことを伝えたいと言って始まりました。そして、クラスみんなに伝えたい、紹介したいコーナーが生まれてきた。今年は自分の中では、単に子どもがみんなに伝えるだけではなく、お互いに伝え合う、伝え合うということが楽しいという思いを感じるのことができる場にしていきたいと考えています。ある日、私が子ども達に紹介したい本を黒板に立てかけておいた。すると、「これ何？読んで」ということになり、夏野菜の本を読んだことがきっかけとなり、夏野菜を植えようということになった。そして、それを契機に、子どもが他の子に見せたい本を持ってくるようになり、彼らが自分が驚いたことを知らせたい「ビックリ本コーナー」ができるようになったのです。こういう子どもの発言を大事にしたいと思います。

**R**：そういう子どもの発言、声に耳を傾け、その気づきを生かすというのは保育にも、小学校の授業にも大切なことですね。

**T7**：そうなんです。最近、こんな出来事がありました。子どもは本当に、ビックリすることに気づくんです。キュウリを栽培しているのですが、ある子が「先生、キュウリがしの字の形をしている」といつてきたのです。そうすると、他の子は自分のは真っ直ぐで、しの形じゃない。なんで、しの形のとそうじゃないキュウリがあるのかということになったんです。そこで、最終的には、Kちゃんのキュウリは下の方にできていたから、地面につかないように曲がっていったのだと。こんな風に、子どもは形の違いに気づき、推理を深めるのです。それから、キュウリの先に花がついているのを見つけた子は、「キュウリは花のおしり

から生まれてくる」といったのです。花が最初に咲いて、その花の下、つまり、おしりが膨らんでキュウリが育ってくるということに気づいてきたのです。子どもの気づきや観察力はすごいなって。そして、そのつぶやきが消えないよう、保育室の壁面に貼るようにしました。そのつぶやき、気づきが他の子に影響するのです。

ここでの意識の変化として2つの点が重要である。1つは幼小の架け橋となるという時に、単に幼稚園と小学校の先生をつなぐということだけではなく、同じ幼稚園の先生とも保育を通して、どのようにつながっていくのか、また、子ども達の背後にいる保護者とのような関係を形成していくのかが大きな課題となっている。このことは**T5**の発言に表れているが、自分のクラスを上手く運営するという意識を超えて、園内でどのような役割を果たすべきかを意識していることがうかがえる。無論、このような変化は1年間幼稚園での生活を経験し見通しがもてたこと、また、自分が学年主任という役割を担ったことによることも大きく作用していると考えられる。このことは2クラスと一緒に2クラス全員の子どもを見ていこうとするものである。その中で、子どもの姿をどのように見ていこう、理解していこうとするのかという、保育計画の根幹にかかわることのように思われる。もう1つは、前述の点に深くかかわることであるが、子どものつぶやきや言葉をどのように理解、解釈し、保育を計画していこうとするのかということである。これは事例1の時より、さらに深まっているといえよう。これは**T6,7**に表れていることだが、具体的に子ども達の言葉を取り上げ、比較したり、違いに気付かせたり、そのことを次につながるよう意欲を喚起したり、視点を絞る発言をし、子どもの思いや活動をつなげる保育者の役割に表れている。しかも、それを幼稚園教育要領が示す「伝え合い」ということに結びつけながら、見通しをもってかかわっている点が保育者としての保育を組織する力として優れた力量を示していると考ええる。

事例3 連携の関係作りのための細かな配慮と工



夫（平成26年10月7日）

この園内研修会の前に、E小学校で幼小連携を中心とした1年生の算数の研究授業がおこなわれた。このような状況があったため、インタビューでは連携のことが話題の中心となった。

R：幼小交流について聞かせてください（週日案をみながら）

T8：給食体験というのは5年生のクラスに年長児がいて、給食を共に食べる交流です。小学校のクラスで、5年生が配膳してくれたものを食べます。交流のために時間をつくるのは小学校側は時間がないので大変です。小学校は授業時間数が重要なので。ですから、それに縛られない給食の時間や中休み時間の交流というものも大切だと考えます。幼稚園と小学校がフェンス1つで隣り合わせになっている利点もあると思います。このような短い時間の交流は幼稚園児も生活のペースを崩さないで済む良さがあります。

R：交流には時間的な制約があるので、それを生かそうと思うと隙間時間の活用が重要だということですね。

T9：それと、交流を積極的に進めるかどうかは、先生方の価値観に依るところが大きいと思います。

R：その価値観の違いとはどういう事ですか。

T10：自分が小学校にいた時は正直、幼小の交流は少し負担に感じていました。やはり、小学校の先生は授業に時間をかけたいと思っています。この地区はもともと幼小中の交流が盛んですが、他の地区から来た先生には、この重要性や必要性が伝わり難い点があります。伝わらない壁を感じます。もちろん、自分も小学校にいたので、そのこともよくわかるのです。ただ、それでは前に進まないで、飲み会や女子会などの本音が言える場から、「ちょっと交流は大変」、あるいは「交流する中で小学生も成長する」という声を大事にして、関係を築いていきたいです。先日の女子会で、小学校の新任の先生が「幼稚園と交流したい」というてくれたのがうれしかったです。

R：いろいろ苦勞して関係作りをしているのですね。そういうオフィシャルではない場での働きかけも、橋渡しの役割も担っているのですね。とこ

ろで、他に実践していることはありますか。

T11：今は特に、J先生のクラスにいる加配のS君のことを話し合いながら、どのように援助、支援していくのか、クラス担任だけでなく、学年として同じ指導に立って、S君にかかわるようにしています。また、小学校へ進学するにあたって、どのような進路がいいのか、一緒に考え、親の相談にものっています。小学校は幼稚園に比べ、ベテランの教師もいるので、新任教員を育てる体制があります。上の先生からアドバイスをもらえることは大きい。自分もそういう存在になりたいと思います。

R：なるほど。教員の支援体制も、小学校と幼稚園では違うということですね。

T12：それは学校の規模が違うからしかたがないけど、幼稚園には幼稚園の先生のキャラクター、小学校には小学校の先生のキャラクターがあります。それぞれにはそれぞれの良さがあり、同じ教員でも、それぞれに相応しい役割、在り方があると思います。たとえば、幼稚園の先生はやわらかく、あたたかく、一人一人の子どもを観ることに長けている。それに対して、小学校の先生はメリハリをもって、ケジメをつけて指導しなくてはならないと思うのです。

幼小の連携を効果的にこなすには、もちろん、具体的に園児と児童の交流という機会が必要である。また、それを促進するために、I先生は自分がその架け橋になるよう小学校の先生方の意識を幼稚園に向かせ、心理的近親感も得てきた。しかし、それだけで事が動くわけではない。小学校の抱える事情というものも考慮していかなければ、実のある交流、連携が成り立たないことをI先生は熟知している。それはどちらの立場にも身をおいたI先生だからできることであろう。T8で言われているように、幼稚園はある程度時間の融通、配分が柔軟に担任の裁量で操作できる。しかし、小学校は授業時間数で動いていくため、そうはいかない事情がある。その辺を考慮しながら、小学校の先生方に負担感を与えず、有効な交流を考えると、中休み時間の交流というものは効果的である。このような細かい配慮、工夫ということが連

携を促進、持続させていくには不可欠であると考ええる。また、教師の役割の違いも理解しておくことも重要といえる。連携は幼と小を等質にすることではない。互いの違いを理解しつつ、それぞれの独自性を尊重することが重要であるからである。

事例4 子ども同士の伝え合い、学び合いを意識して－研究テーマとの接続－（平成26年11月25日）

この日、年長の2クラスはそれぞれ12月にある発表会へ向けて、劇作りをしていた。I先生のクラスは「あらしの夜に」で、もう1つのJ先生クラスは「にじいろのさかな」に取り組んでいた。

R：今年の劇の題材はどのようにして決めたのですか。

T13：今年の劇は「あらしの夜に」にしました。昨年は幼稚園に来たばかりで、見通しもありませんでした。今年で今年で仲間の大切を感じて欲しいと考えています。

R：昨年は「泣いた赤鬼」で、やはり友達の大切さでしたね。

T14：昨年は同じ友達がテーマでしたが、やはり、この時期、子ども達にとって、仲間は重要なテーマです。また、自分は独りじゃない、仲間がいる、そういう子ども同士の関係をつくるのが、発達のにも大切だと感じています。この地域は地域の結束力も高く、ほとんどの子が隣のE小学校に進学していきますから。

R：どのようにこの物語を子ども達に提示したのですか。

T15：「あらしの夜に」は長い話ですが、子ども達はアニメやDVDで観たことがあります。私も2日間かけて、この本を子ども達に読み聞かせました。大切なシーンは紙芝居形式にしてやりました。そのままの読み聞かせでは難しい部分もあるので。それから、この本の感想を子ども達に聞きました。子どもからは、「転んで泣いている時、慰めてくれるのが仲間」や「さみしい時、一緒に遊ぼうと誘ってくれるのが仲間」、「入れてと聞いた時、いいよと言ってくれるのが仲間」という意見がでました。そこで、「仲間って、どんな感じ」と聞いたところ、「つながっている」「一人一人が

つながっている」「心がつながっている」という意見がでてきて、この劇は「仲間のつながりでいい」ということになりました。まさに、子ども同士の伝え合いが大事です。

R：すごいですね。その後、どのように進めたのですか。

T16：子ども達に心に残っている場面を絵にしてもらいました。この場面がいろいろ出てくることで、それをどうつなげてストーリーにしていけるかが、子ども達の中でつながっていききました。そして、その後、この劇にはどんな役が必要か、どんな衣装、背景、歌が必要かをみんなで話し合い、WEB図にしていきました。子どもが描いた絵も、WEB図も保育室に掲示してあります。

R：それって大事なことです。子ども達自身が自分達の思いや思考、足跡が視覚化されたことで自覚化できるし、自分達で劇をつくっているという意識を一層高めますね。外国ではそういうやり方をドキュメンテーションというのですが。今日の練習でも、子ども達同士が考え合って劇作りをしていましたね。

T17：はい。今日も子ども達同士がセリフを考えました。たとえば、「今日はいい天気だね。ピョン」でしたが、最後の「ピョン」というところに、あの子の気持ちが表れていました。この子はウサギの役なので、セリフの後に、「ピョン」と入れたくなったのでしょう。それを同じ仲間がいいねと認めるので、子どもの自信も強まるのです。そして、その思いが詰まった言葉に、動きが出てきます。こういう子ども達の「伝え合い、学び合い」が自分を、自分達を創っていくのです。

R：本当にそうですね。だから、子ども達は仲間

に成長していくのです。ここでの劇作りは既成の台本があり、子ども達が歌やセリフを覚え演じるというものではない。子ども達自身が何をどうやりたいかを話し合い、アイディアを出し合いながら創り上げていくものである。そのため、子ども達自身が意思決定し、プランニングできるよう、保育者はそれらの意見をWEB図で視覚化する、意見やアイディアを出させ、広げながら、一つの方向へ目的が定まり、

活動が進むよう援助している。とくに、ここで I 先生が使う **WEB 図** は小学校の時に活用したものだが、幼稚園でも有効なものは利用し、活用している。そして、さらに重要なことはこの時期の子ども達の発達にとって、協同する経験というものが大切であり、この活動では「友達と一緒に劇遊びに取り組み、共通のめあてに向かって自分で考えたり、友達と協力したりする」ことをねらいとしておこなっている。同時に、T17 のところで述べているように、これらの活動は幼小連携、もっと言うと、この地区が進めている幼小中連携のテーマ「伝え合い、学び合い」が意識されているということである。I 先生はこれらの活動を通して、子ども達が物語から感じたことを伝え合い、それぞれの思いを理解し合ったり、アイディアを出し合いながら、劇を創りながら、互いの良さを学び合うことが重要だとしている。幼小の連携において研究テーマ、連携を貫く大きな柱があることが、連携を強める役割を果たしているといえよう。

事例 5 再び小学校に戻って、連携の意味を振り返る（平成27年 8 月 6 日）

I 先生は平成27年 4 月、2 年間の長期派遣研修が終わり、元いた E 小学校に戻った。ここでは 1 年生を担当し、E 幼稚園から進学してきた児童も担任している。I 先生が 6 月16日に幼小連携の研修会で、学校探検の授業をおこなった。授業後、E 幼稚園と E 小学校の教員が研究協議会をもった。この時、筆者も参加したが、インタビューをする時間が取れず、夏休みに入り、改めて I 先生にインタビューしたものが以下のものである。

R：久しぶりに小学校に戻って、1 年生を担当して、以前と違いがありますか。

T18：幼稚園の子ども達と一緒に進級してきたという思いが強いです。3 年前も 1 年生を受け持ちましたが、その時感じた印象とは違い、持ち上がりという感じです。初めて 1 年生を担当した時は子ども達が小学生になってきたという成長に感動しました。しかし、今は幼稚園や保育園の成長の上に子ども達の成長があると実感しています。0 からのスタートではなく、幼稚園、保育園の土台

の上にあるということが実感できるのです。

R：6 月は研究授業の後、お話を聞けなかったの  
で、そのことについて聞かせてください。

T19：まず、いえることは子どもを観る目が違って  
きたということだと思います。しかし、まだ 1  
年生の 6 月では自分のクラスを作っている最中で、  
公開授業をすることは大変でした。今の子ども達  
の実態を踏まえつつ、生活科を要にしながら学級  
経営をしていきたいと思っています。

R：教室環境も、壁面も工夫されていましたね。

T20：ええ、年長の担任の時、劇作りをしました  
が、その時のように **WEB 図** をしたり、子どもの  
絵や写真を入れて、模造紙にまとめ、学びの足跡  
を残しています。また、子ども達はその中に、自  
分の名前や意見があることで喜びます。まさに、  
幼稚園でやったことが生きています。ただ違いは、  
幼稚園だと時間的にも自由で、子ども達は自分の  
興味をもったことにこだわり、深めることで保育  
は成り立っていました。小学校は45分間の授業時  
間の制約もあるので、その辺が難しいです。

R：限られた制約の中ですが、I 先生は子どもの  
意見や声を大切にしていますね。

T21：私は子ども同士の意見をつなげていきたい  
と考えています。幼稚園では、自分の意見をいう  
ことができればよかった。しかし、1 年生では子  
どもが友達の意見に耳を傾け、いろいろな考えに  
気付き、反応することが嬉しいのです。そういう  
子どもの意見の連鎖は保護者にも伝わります。あ  
る母親はそういう伝え合いで、自分の子どもの言  
っていることにも光るところがあるのだと再発見し、  
嬉しいと語ってくれました。そういう子どもの姿  
を保護者と共有していきたいし、一緒に喜び合っ  
ていきたいと思っています。そのことで親の不安も解  
消されると、安心感が生まれ、さらに子どもも伸  
びていきます。

R：今回の授業では、まさに伝え合いを大事にし  
ていましたね。

T22：今回の授業では、どのように伝え合いの場  
を創るかに苦心しました。やはり、伝え合い学び  
合いを意識すると、ペアにすることが 1 番だと考  
えます。しかし、ペアにして話すのにも、ひらが



なを書けない子もいるので、最初は絵を描く、学校探検へ行って、自分のお気に入りのところを絵にすることから始めました。そして、生活科では最後の振り返りが重要です。この振り返りによって、次の活動への意欲が変わります。また、そのためには、その間の活動がいかに充実していたかが問われるのです。

R：なるほど。どのように授業を構成してきたのですか。

T23：はじめに学校探検をしました。すると、子ども達からなぜなぜ、不思議、疑問が出てきました。それを解消しようと、インタビューを行い、それにつれて徐々に子ども達も学校に対する理解が深まり、お気に入りの見つけて、発表しようと発展してきたのです。生活科は子どもの気づきや興味を大切にしますが、同じように子どもの興味関心を大切にする幼稚園の保育も、自分の中で今の授業構成をする土台で、学んできたことが活きています。くわえて、今回、授業のスタイルとして、机をなくし、イスに座って、黒板の前に集まって伝え合いやペア活動を行ったのも、幼稚園にいたからできたのだと思います。

I 先生が幼稚園での人事交流を経て大きく意識が変わったことは、1年生の教育が0からのスタートではなく、幼稚園、保育園の土台の上にあるという実感であろう。それは幼稚園で子ども達を育ててきた経験や、子どもが何がどこまで理解でき、わかっているかが把握できるからだ。こういう積み重ねがあれば、お互いの教育を尊重し、連携をスタートすることができるであろう。ほとんどの連携ではこのような経験をした教員は希少であるから難しいことであるが、まずは互いの保育・教育を尊重する姿勢や理解する態度は不可欠であるといえよう。その上で、スタートカリキュラムにおいても、それを子どもにとって効果的なものにすべく、そのやり方、形態については柔軟に、保育者も小学校の教員も意見を述べる場が必要といえよう。とくに、イスだけの授業展開やペア活動はこれにあたる。そのことが、互いにとっての互恵性であり、連携を行う意味であるといえる。

T23 の部分の言葉は、幼小の連携の研究、スター

トカリキュラムの充実を図る、内容面での架け橋の言葉でもあると考える。連携には様々な架け橋が幾重にも重なり合いながら、強固な架け橋となっていくのである。

#### IV 総合的考察

I 先生の幼小連携の架け橋になりたいという意識は様々なバリエーションを経ながら、より強固なものに深化してきた。そして、そのことは同時に幼小をつなぐ教員に求められる役割を語っているといえよう。それは、次の3つに集約されるのではないだろうか。

##### 1. 関係性形成力

幼小連携を進めるために教員に求められる力の1つは連携の当事者が幼稚園、小学校の教員はもとより、保護者、地域のスティックホルダーと関係性を作ることではないだろうか。I 先生は2年間の人事交流を通して、この関係作りに苦心してきた。ともすると、このような人事交流は特殊な状況であり、当事者のみが体験する閉じたものになりがちである。しかし、このI 先生は自分の使命の1つのように、この関係形成を意識して行動した。それは前述の事例のT1の箇所に表れている。このE幼稚園、E小学校がフェンス1つで隔てられた地理的近さも大きな要因ではあるが、このI 先生が人事交流するまではそれほど互いが意識されていなかったのも事実である。そう考えると、このI 先生が幼稚園へ派遣されたことは、小学校の先生方の幼稚園に対する心理的近親感を生んだといえよう。I 先生が小学校の教員生活の中で築いてきた人間関係があったから、先生方の注目、関心も集めた。最初は「I 先生、頑張っているかな」、「大丈夫かな」、「上手くやっているかな」等の心配をする、あるいは興味本位な心理だったものが、幼稚園の教育内容、方法への理解へとつながり、幼小連携を考えることへと意識が変貌していったことが伺える。また、このような努力は公式な連携、話し合いの場のみならず、彼女がパーソナルな教員同士のスポーツ大会、女子会等を通じて、幼稚園教育の意味やその大切さ、楽しさや喜びを伝えたことも大きな要因といえる。

さらに、彼女が意識して保護者へ働きかけたことも大事な役割だったといえよう。I先生にとっても、幼稚園へ行くということはほぼ毎日顔をあわせる保護者とどう付き合うか、距離を保つかということも課題の1つであった。事例2のT5に表れているように、保護者から「小学校へいくと、先生が遠く感じる」と言われたことは少なからずショックでもあった。それに対して、彼女は幼稚園にあっても、小学校へ戻ってからも、子どもの姿、成長を伝えながら関係性を形成していったといえる。もう一方、このような子どもの姿、気づき、発言、ことばを保育室や教室の文脈でどのように理解し、解釈するかが、保育や授業を作り出す力へとつながっていている。

しかし、忘れてはならないのはI先生がこのような働きができたのも、P園長・校長の存在を抜きにしては語れない。P園長・校長はI先生が人事交流をした2年目にE幼稚園、小学校の両方の園長、校長を兼任した。P校長はI先生が新卒の時の指導教員でもあり、絶大な信頼を寄せる上司でもある。また、P先生の兼任人事は多忙を極めるが、幼稚園へも足しげく通い、太陽のように明るい性格は幼稚園の子ども、教員、親からも強い信頼を寄せられている。幼小連携にとって、研修・学校組織として、このような2人のキーマンがいることはトップダウン、ボトムアップからの2つの強力なベクトルをつなぎあわせる役割を生んでいる。後藤は「小学校初任教師を支える育成論」(後藤、2014)の中で、協働学習のデザイン者としての管理職の介入の重要性を指摘しているが、実はこのI先生の長期派遣の人事に深くかかわったのもP校長である。今回の人事交流における2人のキーマンの存在は、この連携がそれにかかわる幼稚園、あるいは低学年の教員のみに限定されたものにならないように関係づけられ、さらに持続していくための研究体制、幼小の関係を創る意味で重要だったといえよう。

## 2. 保育・授業組織力

2つ目には子ども理解に基づいた保育・授業組織力の必要性である。

朝倉は子どもの気づきを拡大・深化させる生活

科の授業原理を次のように述べている(朝倉、2008)。生活科における気づきの特質として、①主体的なかかわりの結果であること、②個別的・個性的であること、③具体的・現実的・感覚的・感情的であること、④直感的、直観的であり非連続であること、⑤認識の芽であり知識・理解に発展することの5点である。さらに、気づきを拡大・深化させる学習過程の要件として、①「具体的な活動や体験」を中心とした学習過程であること、②「具体的な活動や体験」における問題発見と問題解決のある学習過程であること、③「具体的な活動や体験」の繰り返しが可能な学習過程であること、④繰り返しとしての話し合いのある学習過程であること、⑤他教科・領域や日常生活との関係が意識された学習過程であることである。このような子どもの気づきをどのように生活科、スタートカリキュラムに活かすかはもちろんのこと、このような子どもの気づきの活かし方は保育、とくに年長児の保育にも重要である。

また、平成22年にでた「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」(文部科学省、2010)の報告書では、幼児期から児童期にかけての教育活動では、発達の段階を考慮し、直接的・具体的な対象とのかかわりの中で行われる必要性を強調している。同時に、幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開することも重要であると指摘している。「横浜版 接続期カリキュラム 育ちと学びをつなぐ」(横浜市こども青少年局、2012)では、この調和のとれた教育展開を次のように解説している。調和を図るために大切なことは相互理解と、目の前にいる子ども理解であり、その展開においては幼児期では楽しみながら、課題を見だし、解決する取り組みを通じて、自覚的に学ぶ意識につなげることであり、小学校においては驚きや発見を大切に、学ぶ意欲を育てる活動を取り入れながら、自覚的な学びを確立していくことだと述べている。

事例2のT7では、子ども達のキュウリの形の違いに気付いたつばやきから、そのことの因果関係を探ろうとすることを一緒に面白がり、子ども

同士に比べさせたり、そのことを尋ねたりしながら、疑問を解決しようと探究を深め援助する保育者のかかわりがうかがわれる。また、子ども達のつぶやきや気づきを掲示し、広げようとしたり、意識が継続するように意図している。このように個別的に発せられる子どもの声をつなげ、保育として形作り組織化することが保育者として重要な役割である。同じく、事例4のT16,17の発言では子どもの意見を取り上げながら劇作りを進めている。子どもの発言をつなぎ合わせながら、WEB図を作成し、計画のプランニングをするとともに、子ども達に活動を自覚化させ、保育を創り出そうとしている。ここでは、劇という活動を創り出すだけでなく、自分のよさ、自分自身の価値というものへの気づきも促している。自分の考えたセリフが友達に認められることにより、自分のよさを再認識しているのである。また、事例5のT23では子ども達の気づきを生かし、学校探検の授業が組み立てられていることがよくわかる。具体的な体験や経験が他教科とも結びつけられ授業として組織化されている。したがって、幼小連携をおこなう教員には子ども理解から保育・授業を創り出していく組織力が必要といえるであろう。

### 3. 研究構築推進力

3つ目として、研究構築推進力が求められる。ここでいう研究構築推進力とは、幼小の連携を通して、自分達の保育や教育、授業の在り方を問い直すことであり、ひいては保育観や教育観、指導観を問い直し、新たな保育や教育を構築し推進する作業であるといえる。また、この研究構築推進力が幼小連携を進める核であるとも考える。

事例3のT10では、幼小の教員がもつ価値観の違いに触れている。そういう価値観の違いを前提としながらも、互いに幼小連携の交流、活動を通して新たな価値観を創出していくことが重要であろう。その際、それは単なる感情的理解、共感ではなく、共通して考えていく軸、思いや思考を整理するテーマ、立場を超えて集い議論できる場、学びのプラットフォームを必要とする。

事例4のT17、事例5のT22における「伝え合い、学び合い」というキーワードは、E幼稚園・

E小学校・E中学校を通じたこのE地区で取り組む幼小中一貫モデルの研究テーマでもある。このテーマこそが、共通して考える軸であり、学びのプラットフォームでもある。幼小、あるいは幼小中の連携が単なる通過儀礼的交流やイベントに終わらないためにも、このようなテーマ設定は重要である。I先生は人事交流で幼稚園に来た2年目の夏、W市の教育研究発表会で、「幼小連携における伝え合いの重要性」を発表した。このことは、同じ市の幼稚園、小学校の教員の共感を得ただけではなく、中学校の教員の理解も得た。それは筆者が後日、同じW市の別な地区の幼小中の連携研修会に招かれた時、中学校の校長先生から、I先生の発表に感銘を受けたことを聞いたからである。中学校でも同じように伝え合い、学び合いは大事にしており、幼稚園教育からこのようなことが意図されて教育されていることに驚き、幼稚園教育の理解を新たにしたという内容であった。ことに、中学校は教員の教える内容が教科専門になるため、教科横断的なテーマでなければ研究も、連携も進まないということであった。

確かに、平成22年に出た報告書では教育の連続性、一貫性が教育基本法や学校教育法から根拠づけられ、意味づけられたことは大きな成果である。しかし、それは連携、一貫性を考える際、大きすぎる内容である。そのため、この連携の研究を推進していこうとすれば、より日常の保育、授業と一貫した、検証可能なテーマ設定、課題設定が求められよう。

酒井は連携は最終的には、校種間の独自性と一貫性・連続性の双方を踏まえて学びのつなげ方を検討し、大局的な観点から保育と指導のフィロソフィーを育むことだとしている。また、それは保育者と小学校教師が抱えてきた基本的な信念をいったん「括弧」に置いて、本当に大切なこと、どうつなげていくべきかを省察することを要請することでもあると語る。つまり、校種を超えて、共通のテーマを持ち連携、研究を推進するならば、そこに新たな教育の共通、連続したフィロソフィーが創出され、共通の展望と関係性をもつ教師集団、あるいは保護者や地域を含むコミュニティが生み

出されてくるのではないだろうか。

冒頭に引用したニュージーランドの連携の報告書には効果的移行を次のように記載している。「効果的移行は子どもが自分自身の価値や自信、粘り強さ、学校での成功を問い直すものである。そして、この移行は生涯学び続けるための経験であり、生き生きと学び続けることであり、他者との関係性をつくるための時間でもある」と。つまり、効果的移行とは単なるシステムの問題ではなく、その移行を当事者が問い直し、他者と関係を再構築しながら、生涯に続く学び続ける意欲を喚起するものでなければならない。そして、さらにこのことを言い換えるなら、効果的な真の幼小連携は子どものみならず、教師も、保護者も、地域も自分達自身を問い直し、学び続ける意欲を喚起し、新たな関係性をつくるための時間であるといえよう。

#### 注

注：通常、連携は保育所も含め、保幼小連携と表記することが多いが、今回の事例は幼小に限定されることから、幼小連携と表記して用いる。

#### 引用文献

EDUCATION REVIEW OFFICE New Zealand  
Government 2015 *Continuity of Learning : transitions from early childhood services to schools* 1-10

Kathy Sylva, Iram Siraj-Blatchford 2010

Early Childhood Matters : Evidence from the Effective  
Pre-school and Primary Education project 149-165

文部科学省 2008 「幼稚園教育要領」 教育出版 22

無藤・柴崎・秋田編著 2008 「幼稚園教育要領の基本  
と解説」 フレーベル館 149-151

文部科学省 2008 「小学校教育要領」 東京書籍 73

文部科学省 2008 「小学校教育要領解説 生活編」  
日本文教出版 7

ベネッセ次世代育成研究所 2007 「第1回幼児教育・  
保育についての基本調査（幼稚園編）速報データ集」  
56

無藤隆 2005 「幼小連携から幼児教育のカリキュラム  
へ 幼児教育と小学校教育をつなぐ」 お茶の水女子

大学子ども発達教育研究センター 13-15

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関  
する調査研究協力者会議 2010 「幼児期の教育と小  
小学校教育の円滑な接続の在り方について(報告)」 7-8  
10-11

文部科学省 2013 「平成24年度幼児教育実態調査」 13  
酒井朗/横井紘子 2011 「保幼小連携の原理と実践」  
ミネルヴァ書房 110-112 138-151

廣内厚士 2013 「人事交流教員から見る保育者の専門  
性」『発達』Vol34 ミネルヴァ書房 46

後藤郁子 2014 「小学校初任教師の成長・発達を支え  
る新しい育成論」 学術出版会 37-39

朝倉 淳 2008 「子どもの気付きを拡大・深化させる  
生活科の授業原理」 風間書房 66-68 159-169

横浜市こども青少年局 2012 「横浜版 接続期カリキュ  
ラム 育ちと学びをつなぐ」 9-10

#### 要旨

本研究の目的は、幼小連携の人事交流における  
教員の意識変容を明らかにすることである。幼稚園  
教師へのインタビューを事例として分析した。  
その結果、幼小連携を進める教員の役割として、  
以下の点が見いだされた。(1) 幼小連携の深ま  
りには、子ども同士、教師、家族、地域の人々との  
関係性の形成が必要であること。(2) 幼小連携  
を指導する教師には子ども理解に基づいた保育  
や授業を構成する力が重要であることであること。  
(3) 効果的な幼小連携を行うにはテーマをもった  
研究推進体制が必要であること。

(2016年9月12日受稿)